三〇　岩のどんど焼き（真鶴町）

テーマ27
道祖神に関する祭り・行事

一　名称

岩のどんど焼き

二　伝承地

神奈川県足柄下郡真鶴町岩　岩海岸

真鶴町は神奈川県南西部、箱根山南東部の白銀山から真鶴半島に向かって伸びる長い尾根上の先端部に位置する。伝承地の岩海岸は岩地区の海岸部、岩港に隣接する砂と転石混じりの海岸で、夏には海水浴客でにぎわう。石橋山の合戦で敗れた源頼朝がこの地から房総半島へ逃れたという伝承が古くから伝えられている（記録は小田原北条氏文書が初出）。確かに冬のよく晴れた日には海の向こうに三浦や房総半島の山並みが望まれる。

三　実施の期日及び場所

毎年一月一五日前後の土曜もしくは休日に実施されている。以前は一月一四、一五日の両日にわたって行われていたようだが、昭和三〇年代にいったん途絶えた後、昭和五三年に再興されてからはこの日一日となった。なお、どんど焼きの構築物（当地では「やぐら」と通称されている）の製作に、正月三ヶ日明け直近の土曜、休日の一日をあてている。場所は岩海岸である。

四　行事の内容

真鶴町のどんど焼きは、古くは小字単位の道祖神脇で行われていた。小字は岩地区では、大上（おおかみ）、上（かみ）、下（しも）、大下（おおしも）、細山（ほそやま）の五ヶ所。真鶴地区は、東、西、丸山、城口（じょうぐち）の四ヶ所に道祖神があって行事の単位となっていた。なお道祖神の形姿は伊豆東海岸を中心に分布する丸彫僧形道祖神で、両地区の小字を単位に、その地区の境界線道路脇などに設置されていた。時代に伴い位置は変化したが、現在でも町内各地に分布している。

道祖神の周囲は戦前までは河原や石材採掘地など人家から離れた場所にあり、その場でどんど焼きが可能であったが、戦後は宅地の拡大に伴い岩地区は岩海岸にまとめられ、真鶴地区は小字丸山地区が岩港南側に隣接する大ヶ窪海岸で実施していた。岩地区では当初岩海岸に小字単位で数基が立てられていたが、昭和五三年以降は一基となった。その後平成一一年、真鶴地区小字丸山地区では宅地化の拡大でどんど焼きが不可能になり、岩地区と合同して岩海岸一ヶ所の一基にて行われるようになった。現在は真鶴町全体の正月飾りを岩海岸のどんど焼きで燃やしている。

どんど焼き行事には子どもたちが太鼓を叩きながら山車を引くなどの付随行事が行われていた。しかし岩地区では戦後行われなくなった。一方、真鶴地区では小字丸山地区で、どんど焼きと山車の巡行が継続されたが、それ以外の地域（真鶴小字東、同西、同城口地区）は早くからどんど焼きは失われ（昭和初年頃？）、山車の巡行のみとなっている。

さて、岩海岸のどんど焼きは「やぐら」と呼ばれる構築物を製作する「竹切り・やぐら組み」作業と、それを燃やす「どんど焼き」が行事の主体である。これに真鶴丸山地区の山車巡行が参加することによって構成される。

行事次第には定まったものはなく、年々によっても変化して来ている。とくに近年は担い手の減少から大きく省略されてきた。そこで調査年となった平成一九年度の実施結果を例示し、続いて昭和一〇年代の様子を比較として掲げた。

①　現在のどんど焼き

平成二〇年度、「竹切り・やぐら組み」作業は一月五日（土）に行われた。二五名ほどの実行委員が岩海岸に集合し、午前中は材料となる篠竹（アズマネザサ）と孟宗竹を採取。また各道祖神脇に出された正月飾りの回収を行う。孟宗竹は柱などとして使われるもので、岩地区の鎮守社である神社から採取する。高さ一〇メートル以上で丈夫なものを五、六本切り出す。篠竹は山間部の適当な場所から切り出し、一〇本を

ひと束として八〇から百束ほどを採取、孟宗竹とともに岩海岸へ運び出す。午後のやぐら組み作業では、まず柱となる長い竹を選び、上部の位置に大小二本の竹を直角に竿状にして取りつける（一〇年ほど前までは七・五・三の比率の三本を竿にしていた）。柱の先端および竿にはダルマを取りつけて飾る。六本の引き綱をかけて柱を立てる。息を合わせ、いかにスムーズに柱が立てられるかがこの作業の醍醐味である。なお立てる際、ダルマを飾った竿は神社側へ向ける。柱の周囲を篠竹で覆い円錐形に形作る。中を空洞にして海側へ入り口を開き、出口に孟宗竹で鳥居を作って備えつける。

どんど焼きは翌週一月一三日（土）に行われた。午前中、岩、真鶴それぞれの地区の道祖神をまわり再度お飾りを回収して、やぐらを飾りつける。午前中から岩地区お囃子保存会の子どもたちによる太鼓の演奏が披露される。真鶴地区から丸山道祖神保存会の山車（トラックの荷台に正月飾りや花飾りを施し、太鼓を演奏する子どもたちを載せて巡行してきた）が到着。子どもたちによる太鼓が演奏される中、会場にいる小学校高学年生を集めて点火役とする。以前は、数え一二歳となる小学五年生の男子のみで行われていたが、これでは子どもがそろわず、また現在では男女の差を設ける理由もないので平成一六年から前述の通りとしている。子どもたちと実行委員がやぐらの入り口に設けた鳥居の前で整列し御神酒をあげ柏手を打ってお祈りをする。やぐらの周囲に子どもを配置し、火のついたしめ縄を持たせ、一斉にやぐらに投げさせ点火した。点火と同時に経験の長い委員が散会して、やぐらが倒れないよう柱の上部に取りつけた引き綱（ワイヤーに荒縄をまきつけたもの）にとりつき、それぞれ引き合いながらバランスを取り、やぐらが燃え進み、中心の柱が燃え落ちるまでコントロールして安全に柱を倒す。会場では子ども会の保護者が中心になってお汁粉と甘酒の振る舞いをする。一〇年ほど前までは親子で餅つきをして配っていたが、現在は来場した子ども達にお菓子を配っている。火勢のおさまるのを待って参加者に団子を焼いてもらった。団子の形には二通りのタイプがある。ひとつは三つ叉となった木（樹種は特定できず）の枝先に白い大きめの丸団子をそれぞれ一個ずつ刺して焼くタイプ。もうひとつは細かく枝分かれした木（コナラが標準）の枝先に紅白の小さな団子をたくさん刺して餅花としたタイプ。後者の割合の方が多い。団子焼き終了後、実行委員と消防団員で消火作業を行い行事を締めくくった。

② 昭和一〇年代のどんど焼き

なお、現在のどんど焼き行事は、かつてのものとは大きく様変わりしている。以前は子どもが主体で営む行事であったが、少子化の進行に伴い現在は点火役や太鼓の演奏に参加するのみである。ちなみに昭和一〇年代の様子を、当時子どもとして参加した方からの聞き書きから簡単に紹介する。

・岩地区では大上、上、下、大下、細山の小字単位で道祖神が設けられ、地区ごとでどんど焼きが行われた。
・子どもが主体の行事とされ、小学六年生の中から大将を決め、子ども達が行事のほとんどを執り仕切った。
・年内一一月頃から山遊びをかねて材料となる篠竹の切り出しを開始した。
・小字単位で「おんべ宿」が設けられ、子どもたちは宿を拠点に準備を整えた。正月三ヶ日が終わると子ども達は地区内の各家庭をまわり、正月飾りの他、米、団子、餅、みかん、現金と引き換えられるブリなどを貰うことができた。
・小字単位で立てた「やぐら」で寝泊まりをし、太鼓を叩いたり、柱を切り合ったり、正月飾りを奪い合うなどして競った。子ども同士の喧嘩は大目に見られた。
・一四日までに山車を引き出しその中に「おんべ」と呼ばれた御幣を飾り、一五日に地区内を巡行した。
・一五日にはまた歌や踊りをおどって各家庭を訪問したこともあった。歌は鼠浄土を題材にした内容で、踊りは神楽の三番叟のようなものだった。
・一五日お昼頃にどんど焼きを行った。消火は消防団など大人たちが手伝ってくれた。

五　組織

岩道祖神保存会と真鶴丸山道祖神保存会、真鶴町自治会連合会が合同で「岩海岸ど

んど焼き実行委員会」を作って実施している。まとめ役・問い合わせは岩道祖神保存会（会長：加藤好一）。岩道祖神保存会の構成は子ども会保護者経験者を中心に岩地区各子ども会保護者役員、岩地区各自治会役員によって構成される。運営経費は岩地区子ども会、岩地区各自治会、真鶴地区各自治会、丸山道祖神保存会、兒子神社、貴船神社、個人による賛助金・寄付金によってまかなっている。

六　由来伝承

行事のいわれなどを説明した伝承は存在しない。行事の意味づけとしては、子どもの健やかな成長を祈る。焼いた団子を食べると風邪をひかない。習字の紙を焼くと上手になる。地域や各家庭の安全や商売繁盛に繋がる。どんど焼きで使った三つ叉の木を家屋の入り口に立てかけておくと魔除けになる。といった説明がされる。

七　記録・文献

なし

八　調査記録・参考文献

（一）映像録音記録

ホームページ用に平成一六年から二〇年度までの記録を写真とともに掲載している。

（二）参考文献

①『神奈川の道祖神調査報告書』（県・文化財保護課　昭和五六年三月）

②『岩の子われら…まなびや百年』（岩小学校百周年記念誌　同小学校ＰＴＡ　平成二年）

③「道祖神と昔の子供達」（櫻井光夫　郷土誌『真鶴』真鶴第一号所収　昭和四二年）

④「道祖神のある場所」（川辺昭二　前掲書第二六号所収　昭和六二年）

⑤「岩のお祭り…どんど焼き」（櫻井武　『真鶴町文化財だより』第一五号所収　平成一四年）

⑥「真鶴町岩海岸のどんど焼き行事」（櫻井武　平成二〇年三月　未発表）

九　その他

かつて、「元旦は大人の正月、どんど焼きの一五日は子どもの正月」といわれ、戦前までは子どもが主体の行事と認識されていた。戦後は子ども会が主体となり、「やぐら」と呼ばれる構築物は親が立てるようになったが、それでも親子が一緒に担う行事であった。しかし一九九〇年代以降の少子化の勢いは著しく、平成一六年以降子ども会のみでは行事を支えきれなくなった。そこで保護者経験者を中心に自治会などの助けを借りて保存会を結成して行事を継続した。しかし以前には当事者であった子どもや親の参加が減り、現在では五〇代以上を主体とする大人の行事になってしまっている。岩道祖神保存会ではこの行事の意義を以下の3点にまとめてとらえている。

一　正月飾りを集めて燃やすという点で一月一日から続く正月行事の一環である。

二　地域住民が協力して行う柱立ての行事である。

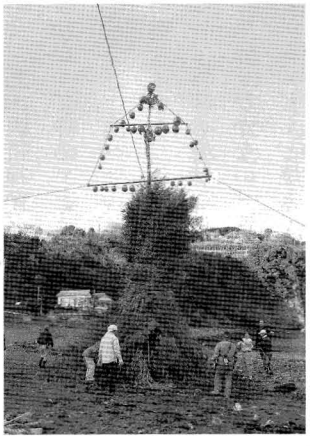
三　子ども達の溌剌とした姿を通して地域を活性化する行事である。

以上の考察から、以前の子どもの行事から地域全体の行事へととらえ直し、全世代が協力して担える行事へと衣替えして行く必要が期待される。しかし、社会や生活の変化、とりわけ少子高齢化のスピードがあまりにも早く進み、担い手問題を中心に大きな課題を背負っているように見受けられる。

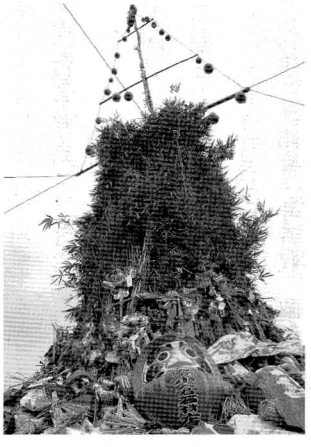
（櫻井　武）

1　やぐらの柱が立つ

2　篠竹をたてかける



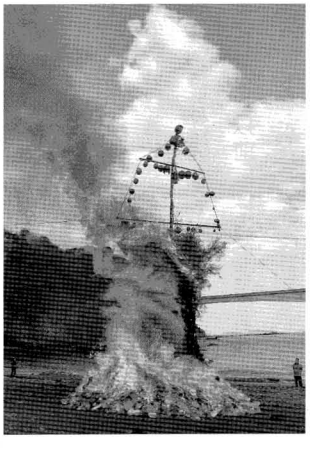
3　やぐらの完成



4　正月飾りで飾られたやぐら

5　山車

6　子どもたちによる点火



7　燃え上がるやぐら

8　だんご焼き